

ZOOM発信・伝承文学あれこれ (14)・大まん口から

2022年8月1日 (月) 20:00~21:00

ただよし
酒井 董美

大まん口から・手まり歌 隠松江市竹矢町上竹矢

歌い手 角田タケさん (明治24年生)

大まん口から揚屋の前まで
三好高さん不昧の近じよ
みなみな同士や見事なことよ
行き先々花芽が咲いて
豊さん 文さん なんだが縞
の
坂尾がしんびよで
紅さんしがうれしき早織り確かなきんによ
おめぐりさまよと からぐりさまよ
向こうの衆に渡いた



収録日 昭和54年 (1979) 12月28日

解説

もともとは江戸時代に各地でうたわれていた古い手まり歌であるが、鳥取県西部地方と島根県出雲地方の古老から、ときおり聞き出すことのできた歌である。

鳥取県西伯郡日吉津村富吉では、

大門口から揚屋の前まで
三好高さんみなみなどうじゃ
見事なことよ 行き先々花見が咲いて
豊さん 文さん 涙が島の高岡しんさん
ふるないそねがわ
錦早織り たつたの銀しゃ
風車よとおめおめ
さアさぬっ手の枕でからたちぬ川
せんせんとんと やつとんとんなら
ちよと百ついた (大道ふさよさん・明治34年生)



さて、江戸時代の同類を調べると、文化7年 (1810) 刊の式亭三馬著『浮世風呂』二篇巻之上 (女湯の巻) に出ていた。

大門口 あげ屋町 三浦高浦米屋の君
みなみな道中みごとなこと
ふりさけ見よなら 花紫 相がわ 清がわ
あいあい染がわ 錦合わせてたつたの川
あのせ このせ やつこのせ
向こう見いさい 新川見いさい 帆かけ舟が二艘つづく
あの舟におん女郎乗せて こん女郎乗せて
あとから家形が押しかける
やれ止めろ 船頭止めろ
止めたわいらにかまうと 日が暮れる
お月は出やる それで殿御のおん心
それ百よ それ二い百よ それ三百よ (中略) とどめて一貫貸した せんそうせん

少し下って天保初年 (1830) ごろ書かれた高橋仙果著『熱田手鞠歌』などにも同類は出ているが、ここでは省略する。石村春莊氏は、その著『出雲のわらべ歌』(昭和38年・1963年・自刊)で、「(江戸) 吉原のおいらん道中の華やかさをたたえたもの」と述べておられる。案外そうであったかも知れない。

筆者が日吉津村の大道さんや松江市の角田さんからうかがったのは、いずれも昭和59年 (1984) であった。当時、大道さんは80歳、角田さんも90歳を越えておられたから、ご高齢だった。この歌もお二人よりも若い年代では、もう知っておられる方はないと断言しても大きな間違いはなさそうである。